

「堺浜・友海（ゆかい）ビーチ・自然再生ふれあいビーチ」における

環境教育と普及活動

(社)大阪自然環境保全協会 理事 田中広樹

浜寺公園自然の会 会長 ○本多俊之

1. 活動方針・目的

埋め立てによりかつての海辺が失われた堺・泉北地域、ここに新たに作られた実験護岸や再生海岸に再生した自然を観察することを通じ、自然のおもしろさ、大切さを伝え、この地域における自然海岸再生をすすめることを目的としています。

2. 活動内容

平成23年3月より、小さな子どもを含む家族連れをおもな対象とした年2~3回の自然観察会・調査会を行っています。行事では、参加者自らの採集、しかけや漁具を使って採集した生物の解説のほか、生物による水質浄化実験、シジミのマーキング調査などを通じて浅場・干潟のしくみや大切さを学んでいます。また、初夏の会は「大阪湾生き物一斉調査」の一環として行うほか、同発表会、大阪湾フォーラムほかの場を通じ多くの市民に成果と堺浜の自然海岸再生を伝えています。

3. 他の活動団体の参考となる事例

主に活動している生物共生型護岸は、できたばかりのころは生物が少なく、いかにしてこの場所の魅力を伝えるかが課題でした。そこで、柴づけなどのしかけ、投網などの漁具を用いて調査をより効率的かつおもしろくしました。また、カニレース・ヤドカリレースなど子どもたちが楽しめるアトラクションを行いました。そうした工夫が観察会を盛り上げ、プログラムは飽きがこないものになりました。

大きな転機になったのはイシガレイの稚魚の出現でした。それまで砂底のなかった海域に生物共生型護岸が作られたことによりイシガレイが人前に姿を見せたのです。しかし、生物共生型護岸は構造上魚が逃げられないため、干潮時に日干しになる危険があり、イシガレイの救出に取り組みました。これは思いがけず子どもたちと生き物との貴重なふれあい体験になりました。

その後、砂地にタイドプールができ魚が日干しになる危険はなくなりました。一方で生物の種類も増え、ヤマトシジミ、ウナギシラス、アユの稚魚なども現れるようになりました。自然再生が進み、観察内容が豊かになるだけでなく、シジミが越冬できているのかを知るためのマーキング調査や、干潟浅場の大切さを知ってもらうためのシジミによる浄化実験など、より幅広い取り組みを実施するようになりました。また、多くの人々、特に子どもたちが愛着を持てるように生物共生型護岸の愛称を募集し、「友海（ゆかい）ビーチ」と名付けました。

4. 今後の課題等

生物の着実な再生により、海岸の魅力は充実してきています。この魅力や重要性を堺市民、特に市内の学校、近隣の施設・企業・団体などさまざまな主体に伝え、連携してゆく必要がありますが、まだまだ今後の課題です。

また、より多くの市民が共感を得られるように浅場・干潟の公益的機能を面白く伝えるプログラムの開発や環境学習の受け入れ態勢づくり、人材養成などたくさんの課題があります。

「堺浜・友海(ゆかい)ビーチ・自然再生ふれあい ビーチ」における環境教育と普及活動



公益社団法人大阪自然環境保全協会
浜寺公園自然の会
(発表者: 浜寺公園自然の会会長 本多俊之)

① 浜寺公園自然の会 渚をふたたびの思い



福都水産園公園部
THE SEAFARING PLACE HAMADERA PARK

昔の浜寺海岸



今の浜寺海岸

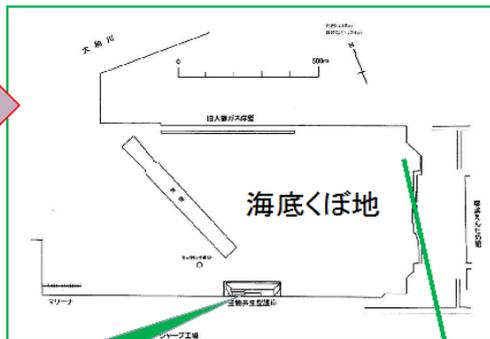


高師浜



浜寺公園自然の会は、堺高石地域に渚の自然を再生したいとの思いから、70mだけ残った高師浜の海岸で生き物調査会を続けてきました。

②堺浜(堺2区)に生物共生型護岸ができる。



2009年 港の跡で垂直護岸、まんなかは貧酸素の海底くぼ地という生物にとっては厳しい環境の堺浜(堺2区)に生物の再生をめざして、生物共生型護岸ができました。



生物共生型護岸



その後、北東側に堺浜自然再生ふれあいビーチ、地先に大阪府の人工干潟ができました。

2010年 市民連携・協働のあり方検討ワーキンググループが結成され、堺の海に関わっている市民として本多が参加。市民参加型調査の開催をめざします。

③2010年大阪自然環境保全協会の協力を得て、堺浜での自然観察会をはじめめる。

しかし、工場地帯の中なので、支持してくれる住民が少ない、実験護岸なので、将来の存続が未知数、できたばかりで生き物が少ないなどの課題がありました。

住民が少ない。

実験護岸 3年をめどにその先は？

生物が少ない。

④いかにしておもしろくするか？



柴づけ

沈めた柴づけを回収します。

小さなカニやヨコエビがついてきます。

生き物が少ないならしかけで捕まえてみよう、竹ぼうきで“柴づけ”というしかけを作ってみました。また、カニやヤドカリのレースで子どもたちを楽しませる工夫をしました。

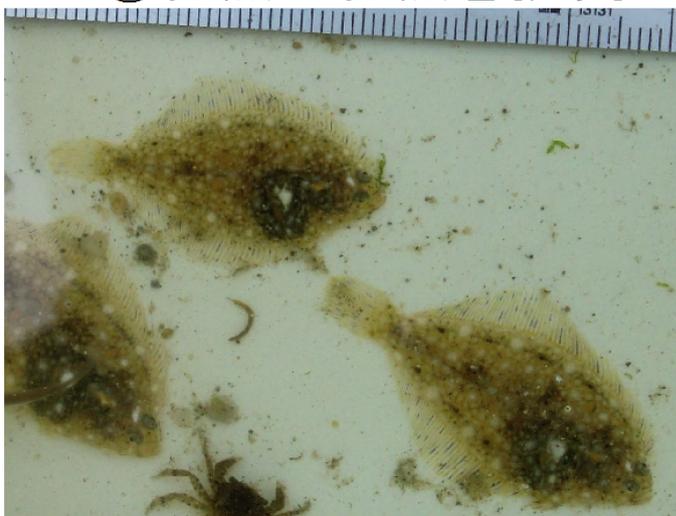


カニレース

第1号レース場カニが走らず失敗

第2号レース場 カニの性質を研究し改良、成功！

⑤自然が自然を救う。イシガレイの出現



しかし、生物が少ないという問題を解決したのは、自然そのものでした。砂底ができたことでイシガレイが出現したのです。そのままでは干上がってしまうので、イシガレイ救出が大事な活動になりました。自然の再生力はスタッフの意識を変えました。イシガレイに続いて生物の種類が豊かになってゆきました。



マハゼ



アユ



ウナギシラス



クロダイ



生物共生型護岸での自然観察は、子どもたちがわくわくする行事になり、参加者も増えていきました

⑦友海(ゆかい)ビーチと命名



こうして都会のオアシスになった生物共生型護岸に愛称をつけようと募集したところ、小学生の女の子が「友達と楽しく遊んだ海」ということから名付けた「友海(ゆかい)ビーチ」が選ばれました。

⑧幅広い環境学習プログラムの展開

生き物のおもしろさをベースに、シジミにマーキングし、持続しているかを調べたり、水質浄化実験などの環境学習プログラムも展開しています。

シジミによる水質浄化実験



シジミのマーキング



⑧今後の課題

生物共生型護岸の今後

海底くぼ地の解消
堺2区全体の自然再生

堺浜での活動は、先日東京で開催された第30回手づくり郷土賞で奨励賞をいただき、生物共生型護岸は社会資本として認知されました。しかし、砂の減少、構造物の消耗など将来はいまだ不安定です。まずは海底くぼ地を解消し堺浜全体の浅場・干潟化を進めてほしいと思います。

より広範な市民に広げる。

パンフレットを作成し、学校での環境学習に使ってもらうようよびかけています。これ以外にもいろいろな試みを行い、堺浜がより多くの市民に支持されるように知恵を絞っています。

